

アビガイル

I サムエル記 25 章

(参考)ダビデの妻になってからのアビガイルを知ることができる

I サムエル記27:1-3

I サムエル記30:1-5

II サムエル記2:1-3

II サムエル記3:1-5

I 歴代誌3:1-9

I サム 25 章

* サムエル記 25 章の背景

サウルの追っ手を避けるためエンゲディ(死海の西岸の真ん中あたり)の洞窟にいたダビデ一行。そこにまたしてもサウルたちがダビデのいのちを狙ってやって来る。しかし、逆にダビデがサウルのいのちをとることができるチャンスが到来する。しかし、ダビデはあくまでもサウルを「主に油注がれた方」として、手を下すことをせず、サウルに対しダビデは子孫を根絶やしにしないことを誓う。

25:1 サムエルが死んだとき、イスラエル人はみな集まって、彼のためにいたみ悲しみ、ラマにある彼の屋敷に葬った。ダビデはそこを立ってパランの荒野に下って行った。

最後の士師であるサムエルが死んでしまう。サムエルの息子の行状が悪いということで、預言者サムエルを退け、王を求めたイスラエルの民だったが、サムエルの死を悼み悲しんだ。「イスラエル人はみな集まって」とあるので、依然としてサムエルは民から尊敬され、霊的指導者として認められていたことが分かる。サムエルの死によって霊的指導者が不在に。

ダビデがサムエルを葬るのに参加するため、エンゲディからラマに行ったのは理解できるが、その後にエンゲディに戻るのではなく、パランの荒野に行っている。パランの荒野は死海よりはずっと南で、紅海に近いところまで広がっている砂漠地帯。かつてはアブラハムの息子のイシュマエルが住みついたところであり、エジプトを出たイスラエルの民がさまよった場所にダビデは行ってしまふ。霊的にはあまりよろしくないところに行ってしまったダビデ。サムエルを失った心境を反映しているのかも。

25:2 マオンにひとりの人がいた。彼はカルメルで事業をしており、非常に裕福であった。彼は羊三千頭、やぎ一千頭を持っていた。そのころ、彼はカルメルで羊の毛の刈り取りの祝いをしていた。

霊的には、けっこう渴いていたダビデでしたが、ここでナバル登場。まだ名前は出てこず、「ひとりの人」として、紹介される。「マオン」というのは緯度的には死海の真ん中よ

りはちょっと南に位置するので、パランの荒野よりはずっと北。「カルメル」はマオンよりやや北。

この一人の人は、「非常に裕福」と描写され、具体的に「羊三千頭、やぎ一千頭」と数字まで出ているので、相当大きな家畜ビジネスをしていたようだ。そのビジネスマンがカルメルで羊の毛の刈り取りの祝いをしていた。三千頭分の羊の毛だったので、相当な量がとれただろう。こんなに豊かになったと、それを見せびらかす意味もあったのかもしれないし、従業員たちへの慰安の意味もあっただろう。もしかしたら、参加者に食事だけでなく、おひねりみたいなものもあったのであろう。

* ナバルはどのような人か考える。何か学ぶことは出来るだろうか。

25:3 この人の名はナバルといい、彼の妻の名はアビガイルといった。この女は聡明で美人であったが、夫は頑迷で行状が悪かった。彼はカレブ人であった。

アビガイル登場。「聡明で美人」と形容されている。聖書の中の女性で、見目麗しさについての形容がなされている女性が多いが、聡明、頭がよくて、機転が利くという形容がなされているのはアビガイルだけではなかろうか。それと対照的な夫のナバル。「頑迷で行状が悪かった」とは、何たる mismatch なカップル。聖書には特に言及されていないが、聖書の解説をしている人の多くが、借金の形に無理やり結婚させられたのでは？とか書いている。そんなに頭がよいのに、そのような悪い男と結婚するなら、無理やりだったに違いないという推理は、外れてなさそうだ。

それからナバルはカレブ人となっているけれど・・・イスラエルの民がエジプトから出てパランの荒野にいる時に斥候 12 人をカナンの地に送った時に良い報告をした族長の一人がカレブだったけれど、その子孫だったりして。参考) 民数記 13:1-6

13:1 【主】はモーセに告げて仰せられた。

13:2 「人々を遣わして、わたしがイスラエル人に与えようとしているカナンの地を探らせよ。父祖の部族ごとにひとりずつ、みな、その族長を遣わさなければならない。」

13:3 モーセは【主】の命によって、パランの荒野から彼らを遣わした。彼らはみな、イスラエル人のかしらであった。

13:4 彼らの名は次のとおりであった。ルベン部族からはザクルの子シャムア。

13:5 シメオン部族からはホリの子シャファテ。

13:6 ユダ部族からはエフネの子カレブ。

もしそうなら、カレブはヘブロンを町をとって住みつけたはずなので、位置的にはそんな感じ。聖書の中で「カレブ人」で検索しても、この I サムエル 25 章にしか出てこない。ともかく、地域的にもユダ族であった可能性は大。

25:4 ダビデはナバルがその羊の毛を刈っていることを荒野で聞いた。

25:5 それで、ダビデは十人の若者を遣わし、その若者たちに言った。「カルメルへ上って行って、ナバルのところに行き、私の名で彼に安否を尋ね、

25:6 わが同胞に、こうあいさつしなさい。『あなたに平安がありますように。あなたの家に平安がありますように。また、あなたのすべてのものに平安がありますように。

25:7 私は今、羊の毛を刈る者たちが、あなたのところにいるのを聞きました。あなたの羊飼いたちは、私たちといっしょにいましたが、私たちは彼らに恥ずかしい思いをさせたことはありませんでした。彼らがカルメルにいる間中、何もなくなりませんでした。

25:8 あなたの若者に尋ねてみてください。きっと、そう言うでしょう。ですから、この若者たちに親切にしてやってください。私たちは祝いの日に来たのですから。どうか、このしもべたちと、あなたの子ダビデに、何かあなたの手もとにある物を与えてください。』

カルメルは、ダビデがいたパランの荒野よりは北であった。荒野にまで噂が伝わるのだから、相当大きなお祝いだったのであろう。ダビデたちはパランの荒野を転々としていた可能性がある。

ダビデは主君サウルに追われる身であったため、浪人状態。ということで、荒野にいる羊飼いの用心棒をしていたようだ。ナバルの羊飼いたちもお客であつたらしい。ダビデは10人の若者を派遣した。10人という数は試みを表すが、正にダビデにとっては、試みとなる一件が起きる。

ダビデは若者たちに、ナバルに対しねんごろに挨拶をさせ、自分たちの仕事ぶりの報告をさせ、報酬をもらおうと考えていた。用心棒のアルバイト収入がないと、ダビデたちは路頭に迷ってしまうので、この10人の若者のミッションはダビデ一族郎党の生計を立てるためのとても大切なミッションだったはず。

25:9 ダビデの若者たちは行って、言われたとおりのことをダビデの名によってナバルに告げ、答えを待った。

ダビデの若者たちがダビデの命令に忠実であったことがわかる。

ダビデの使者に対するナバルの反応。

25:10 ナバルはダビデの家来たちに答えて言った。「ダビデとは、いったい何者だ。エッサイの子とは、いったい何者だ。このごろは、主人のところを脱走する奴隷が多くなっている。

25:11 私のパンと私の水、それに羊の毛の刈り取りの祝いのためにほふったこの肉を取って、どこから来たかもわからない者どもに、くれてやらなければならないのか。」ゴリアテを倒したダビデのことを知らないなんて、あり得ない。「エッサイの子」という呼び名は侮辱する時にサウル王が使った言葉と同じ(参考) I サムエル22:7以降に逃げるダビデに食糧を与えたアヒメレクが処罰される所)。「主人のところを脱走する奴隷」という表現もサウル王のところから逃げているダビデのことを知っての皮肉か? ナバルはさらに、「私のパンと私の水、それに羊の毛の刈り取りの祝いのためにほふったこの肉」と、俺様の物をこれっぽっちも与える気がないというのがありあり。

貧しい人に憐れみの心も何も無い。自分を豊かにして下さり、今年も豊かに羊毛の収穫があったことを主に感謝する気持ちもない。

25:12 それでダビデの若者たちは、もと来た道を引き返し、戻って来て、これら一部始終をダビデに報告した。

ナバルからけんもほろろにされ、仕方なく引き戻すダビデの手下たち。戻ると主君ダビデに何が起きたか逐一報告した。

ナバルのところから戻ってきた若者たちの報告を聞いたダビデの反応。

25:13 ダビデが部下に「めいめい自分の剣を身につけよ」と命じたので、みな剣を身につけた。ダビデも剣を身につけた。四百人ほどの者がダビデについて上って行き、二百人は荷物のところにとどまった。

参考 I サムエル

22:1 ダビデはそこを去って、アドラムのほら穴に避難した。彼の兄弟たちや、彼の父の家のみなのが、これを聞いて、そのダビデのところの下って来た。

22:2 また、困窮している者、負債のある者、不満のある者たちもみな、彼のところに集まって来たので、ダビデは彼らの長となった。こうして、約四百人の者が彼とともにいるようになった。

サウルに追われた初期の頃はダビデに従う者が約四百人であったが、今や六百人に増えていた。「みな剣を身につけた。」とあるので、ダビデの部下はみな武装し、二百人は荷物を守る係、四百人ほどが戦闘部隊としてダビデとともにナバル退治へ。

サウルを油注がれた者として手を下さなかったが、報酬を与えないナバルに対しては、えらくあつけなく力による制圧に出ようとしているダビデ。しかし、次に書かれているナバルの若者の反応を読むと、ダビデがとった行動は当然とるような行動であったと思われる。

* アビガイルはどのような人か。何か学ぶことができるか。

14-17 節

ナバル側の部下の反応

25:14 そのとき、ナバルの妻アビガイルに、若者のひとりが告げて言った。「ダビデが私たちの主人にあいさつをするために、荒野から使者たちを送ったのに、ご主人は彼らをののしりました。

25:15 あの人たちは私たちにたいへん良くしてくれました。私たちは恥ずかしい思いをさせられたこともなく、私たちが彼らと野でいっしょにいて行動を共にしていた間中、何もなくしませんでした。

25:16 私たちが彼らといっしょに羊を飼っている間は、昼も夜も、あの人たちは私たちのために城壁となってくれました。

25:17 今、あなたはどうすればよいか、よくわきまえてください。わざわざが私たちの主人と、その一家に及ぶことは、もう、はっきりしています。ご主人はよこしまな者ですから、だれも話したがりません。」

ナバルの部下の若者の発言から、ダビデたちの働きぶりをうかがい知ることができる。「たいへん良くしてくれた」、「恥ずかしい思いをさせられたこともなく」、「野でいっしょにいて行動を共にしていた間中、何もなくしませんでした」、「昼も夜も、あの人たちは私たちのために城壁となってくれました」

17 節で、主人ではなくアビガイルなら何とかナバル家を救うことができるのではないかと、進言した忠実な勇気ある若者の言葉を見ることができる。

「わざわざが私たちの主人と、その一家に及ぶことは、もう、はっきりしています。」という言葉から、ダビデは当然ナバル一家皆殺しに来るだろうと想像をつけているので、普通はそうしたことが分かる。

* 若者の進言を聞いたアビガイルの反応からアビガイルの人となりを知る

25:18 そこでアビガイルは急いでパン二百個、ぶどう酒の皮袋二つ、料理した羊五頭、炒り麦五セア(1 セアは 7.6 リットルとあるので、38 リットル)、干しぶどう百ふさ、干しいちじく二百個を取って、これをろばに載せ、

25:19 自分の若者たちに言った。「私の先を進みなさい。私はあなたがたについて行くから。」ただ、彼女は夫ナバルには何も告げなかった。

「そこでアビガイルは急いで」てきぱき動ける人。実行力のある人

六百人のダビデの部下に食べさせるには量が少ないように思えるが、急にこれだけ用意できたのは、あっぱれかも。

「私の先を進みなさい。」アビガイルは自分を守ることも考えたかもしれないが、とにかくダビデが攻めてくるのをストップすることを優先したと考えられる。

ナバルに内緒で行動したことも賢明な動き。

25:20 彼女がろばに乗って山陰を下って来ると、ちょうど、ダビデとその部下が彼女のほうに降りて来るのに出会った。

「ちょうど」という言葉は、神の采配を感じることができる言葉。神はちょうどよいタイミングで、アビガイルとダビデを合わせてくださっている。

21 節から 22 節はダビデの発言

25:21 ダビデは、こう言ったばかりであった。「私が荒野で、あの男が持っていた物をみな守ってやったので、その持ち物は何一つなくならなかったが、それは全くむだだった。あの男は善に代えて悪を返した。

25:22 もし私が、あしたの朝までに、あれのものうちから小わっぱひとりでも残しておくなら、神がこのダビデを幾重にも罰せられるように。」

ダビデはナバルに対し、「善に代えて悪を返した。」と怒りをあらわにしているし、22 節では誓いまで立てている。この誓いは後に覆しているが、神様から特におとがめがなかったのも、ダビデがナバル一家を皆殺しにすることは御心でなかったことが分かる。

23 節—31 節アビガイルの進言

25:23 アビガイルはダビデを見るやいなや、急いでろばから降り、ダビデの前で顔を伏せて地面にひれ伏した。

アビガイルは一貫してダビデに対し、低姿勢を取り続けている。

25:24 彼女はダビデの足もとにひれ伏して言った。「ご主人さま。あの罪は私にあるのです。どうか、このはしめが、あなたにじかに申し上げることをお許しください。このはしめのことばを聞いてください。

アビガイルの低姿勢が繰り返し記述されている。自分側に罪、責任があることを告白し、自分が話すことの許可を願っている。

一族の命運がかかっているばかりか、自分の命も危ないかもしれない。かなり勇気のある行動。これからの一言一言が大事となる。男子ダビデがふり上げた剣を収めるのは並大抵のことではない。男のプライドもあるだろうし。

25:25 ご主人さま。どうか、あのよこしまな者、ナバルのことなど気にかけてください。あの人は、その名のとおりの男ですから。その名はナバルで、そのとおりの愚か者です。このはしめの私は、ご主人さまがお遣わしになった若者たちを見ませんでした。

夫の悪口っぽいのが、しかし、先ほどの若者の口からも「ご主人はよこしまな者です」(17 節)という言葉が出ているので、相当とんでもない男だったようだ。「愚か者」という名前もすごい。

アビガイルは、自分がダビデが遣わした若者に会うことができず、こんなことになってしまったことを訴えている。

25:26 今、ご主人さま。あなたが血を流しに行かれるのをとどめ、ご自分の手を下して復讐なされることをとどめられた【主】は生きておられ、あなたのたましいも生きています。どうか、あなたの敵、ご主人さまに対して害を加えようとする者どもが、ナバルのようになりますように。

アビガイルが信仰者であることが分かる。遠回しに、復讐をすべきでないと言進言。ダビデを祝福する祈りの言葉をかけている。普通祝福は上の者が下のものに対してするものだが、ここでは女性のアビガイルが男性のダビデより霊的には上になっている。

25:27 どうぞ、この女奴隷が、ご主人さまに持ってまいりましたこの贈り物を、ご主人さまにつき従う若者たちにお与えください。

アビガイルは自分のことを「この女奴隷」と呼び、ナバルがどこの馬の骨ともわからぬものとして軽くあしらったダビデを「ご主人さま」と呼んでいる。アビガイルの謙遜さがあらわされている。ダビデが必要としている食べ物をタイムリーにプレゼントとして持

参している。

25:28 どうか、このはしためのそむきの罪をお赦してください。【主】は必ずご主人さまのために、長く続く家をお建てになるでしょう。ご主人さまは【主】の戦いを戦っておられるのですから、一生の間、わざわざはあなたに起こりません。

アビガイルはダビデに対し罪の赦しを乞うている。アビガイルの預言的ことば。「長く続く家をお建てになる」実際、神はそのような約束をされる。

25:29 たとい、人があなたを追って、あなたのいのちをねらおうとしても、ご主人さまのいのちは、あなたの神、【主】によって、いのちの袋にしまわれており、主はあなたの敵のいのちを石投げのくぼみに入れて投げつけられるでしょう。

アビガイルの預言的な言葉が続く。実際にダビデは敵に殺されるのではなく、長寿を全うして死ぬ。これは主の守りによるものである。ダビデの敵はことごとく主に裁かれ滅びている。

25:30 【主】が、あなたについて約束されたすべての良いことを、ご主人さまに成し遂げ、あなたをイスラエルの君主に任じられたとき、

25:31 むだに血を流したり、ご主人さま自身で復讐されたりしたことが、あなたのつまずきとなり、ご主人さまの心の妨げとなりませんように。【主】がご主人さまをしあわせにされたなら、このはしためを思い出してください。」

アビガイルはダビデがやがてイスラエルの君主になることを預言している。サウル王に対しては、無駄に血を流したり、復讐をしたりすることを控えていたダビデだが、ナバルに対しては、すっかりそのような考えが吹っ飛んでいるが、アビガイルはダビデにやんわりお説教をしている。主に用いられる器なのだから罪を犯してはならぬし、良心を聖く保っていなければならないと警告している。

そして、最後にアビガイルは自分のことを思い出してほしいとお願いする。もしかして、ナバルとアビガイルには大きな年の差があったのかもしれない。それとも、ナバルが自分の罪のために主から罰せられ死んでしまうことを示されていたのだろうか。ダビデに自分の面倒を見てほしい、妻にして欲しいと遠回しに言っている。

32 節-35 節 ダビデの反応

* ダビデから学ぶことができることは何か。

25:32 ダビデはアビガイルに言った。「きょう、あなたを私に合わせるために送ってくださったイスラエルの神、【主】がほめたたえられますように。

アビガイルの言葉を聞いて、まずはアビガイルに会うことができるようにして下さったイスラエルの神主をほめたたえている。感謝している。

25:33 あなたの判断が、ほめたたえられるように。また、きょう、私が血を流す罪を犯し、私自身の手で復讐しようとしたのをやめさせたあなたに、誉れがあるように。

25:34 私をとどめて、あなたに害を加えさせられなかったイスラエルの神、【主】は生きておられる。もし、あなたが急いで私に会いに来なかったなら、確かに、明け方まで

にナバルには小わっぱひとりも残らなかったであろう。」

主だけではなく、アビガイル、またアビガイルの判断がほめたたえられるように、誉れがあるようにと祈っている。自分が自分自身の手で復讐しようとしていたのを留めてくれたことを感謝している。アビガイルが機転を利かせて、ナバル家を皆殺しにするのを阻んでくれたことを主に感謝し、またアビガイルに感謝している。

25:35 ダビデはアビガイルの手から彼女が持って来た物を受け取り、彼女に言った。「安心して、あなたの家へ上って行きなさい。ご覧なさい。私はあなたの言うことを聞き、あなたの願いを受け入れた。」

見ず知らずの女性の言葉を真摯に受け入れたダビデ。かなり謙遜でないと受け入れるのは難しかっただろう。しかし、主がアビガイルを送ってくださったという信仰があったので、ダビデはそれができた。そして、アビガイルのプレゼントを受け取り、彼女の言うこと、願いを聞き入れたと言って、安心して家に帰るように言った。

36 節—38 節

その後のナバル

25:36 アビガイルがナバルのところに帰って来ると、ちょうどナバルは自分の家で、王の宴会のような宴会を開いていた。ナバルが上きげんで、ひどく酔っていたので、アビガイルは明け方まで、何一つ彼に話さなかった。

大変なことが起ころうとしていたのを妻の機転で防ぐことができたことも知らず、呑気なナバル。アビガイルも酔っぱらっているナバルに話をしても無駄だと判断して、次の日まで待つことにした。

25:37 朝になって、ナバルの酔いがさめたとき、妻がこれらの出来事を彼に告げると、彼は気を失って石のようになった。

25:38 十日ほどたって、【主】がナバルを打たれたので、彼は死んだ。

前の晩の出来事を話したアビガイル。ナバルは、ショックで心臓麻痺でも起こしたのだろうか。いずれにしても、主がナバルを打たれたので、ナバルは死んだ。ナバルがこん睡状態に陥って、十日の猶予があった。十だから試みの期間といえるだろう。しかし、その間にナバルは悔い改めができなかったようだ。

ナバルが死んだことを聞いたダビデ

25:39 ダビデはナバルが死んだことを聞いて言った。「私がナバルの手から受けたそしりに報復し、このしもべが悪を行うのを引き止めてくださった【主】が、ほめたたえられますように。【主】はナバルの悪を、その頭上に返された。」その後、ダビデは人を使って、アビガイルに自分の妻になるよう申し入れた。

ダビデはナバルの死を知り、主が自分で復讐することを留めてくださり、主ご自身が復讐をしてくださったことを知る。そして、主をほめたたえている。ダビデはアビガイルが言ったことを覚えていて、自分の妻にすべく、人をアビガイルのところに遣わした。

ダビデの使者を出迎えたアビガイル

25:40 ダビデのしもべたちがカルメルのアビガイルのところに行ったとき、次のように話した。「ダビデはあなたを妻として迎えるために私たちを遣わしました。」

25:41 彼女はすぐに、地にひれ伏して礼をし、そして言った。「まあ。このはしためは、ご主人さまのしもべたちの足を洗う女奴隷となりましょう。」

ダビデからの使者をあたかもダビデ自身を迎えるように取り扱っている。「すぐに、地にひれ伏して礼をし」、「ご主人さまのしもべたちの足を洗う女奴隷となりましょう」とあくまでも控えめで謙遜な態度を貫いている。「ほら、言った通りでしょ？」なんてことは言わなかった。自分の手がらをひけらかすでもない。

25:42 アビガイルは急いで用意をして、ろばに乗り、彼女の五人の侍女をあとに従え、ダビデの使いたちのあとに従って行った。こうして彼女はダビデの妻となった。

アビガイルのこの動きは、イエス・キリストにつき従った、イエスに呼ばれた弟子のよう。フットワークが軽い。「急いで用意をして、ろばに乗り」、「ダビデの使いたちのあとに従って行った」。つまりすぐさまダビデのところに行ったわけだ。連れて行ったのは、自分の身の回りの世話をしてくれる五人の侍女だけ。ナバルは相当裕福だったのに、それを全部捨てて、ダビデの元に走っていった。主に呼ばれた時、これほどの信仰を私たちは持つことができるだろうか。この時はまだダビデは逃亡生活中。

25:43 ダビデはイスラエルの出のアヒノアムをめとっていたので、ふたりともダビデの妻となった。

アビガイルはダビデの第二夫人となった。

25:44 サウルはダビデの妻であった自分の娘ミカルを、ガリムの出のライシュの子パーティに与えていた。

正妻だったサウルの娘のミカルは再婚してしまっていた。サウルがしたこと。

* その後のアビガイルの生活については、参考の聖書箇所を見る

I サムエル記27:1-3

27:1 ダビデは心の中で言った。「私はいつか、いまに、サウルの手によって滅ぼされるだろう。ペリシテ人の地にのがれるよりほかに道はない。そうすれば、サウルは、私をイスラエルの領土内で、くまなく捜すのをあきらめるであろう。こうして私は彼の手からのがれよう。」

27:2 そこでダビデは、いっしょにいた六百人の者を連れて、ガテの王マオクの子アキシユのところへ渡って行った。

27:3 ダビデとその部下たちは、それぞれ自分の家族とともに、ガテでアキシユのもとに住みついた。ダビデも、そのふたりの妻、イスラエル人アヒノアムと、ナバルの妻であったカルメル人アビガイルといっしょであった。

ダビデがサウルに追われペリシテ人のところに行ってしまった時も同行した糟糠の妻。

I サムエル30:1-5

30:1 ダビデとその部下が、三日目にツィケラグに帰ってみると、アマレク人がネゲブとツィケラグを襲ったあとだった。彼らはツィケラグを攻撃して、これを火で焼き払い、

30:2 そこにいた女たちを、子どももおとなもみな、とりこにし、ひとりも殺さず、自分たちの所に連れて去った。

30:3 ダビデとその部下が、この町に着いたとき、町は火で焼かれており、彼らの妻も、息子も、娘たちも連れ去られていた。

30:4 ダビデも、彼といっしょにいた者たちも、声をあげて泣き、ついには泣く力もなくなった。

30:5 ダビデのふたりの妻、イスラエル人アヒノアムも、ナバルの妻であったカルメル人アビガイルも連れ去られていた。

ダビデがペリシテ人の上司の下で働いている時、人質になってしまったが、後に救出される。かなり苦労している。

II サムエル記2:1-3

2:1 この後、ダビデは【主】に伺って言った。「ユダの一つの町へ上って行くべきでしょうか。」すると【主】は彼に、「上って行け」と仰せられた。ダビデが、「どこへ上るのでしょうか」と聞くと、主は、「ヘブロンへ」と仰せられた。

2:2 そこでダビデは、ふたりの妻、イスラエル人アヒノアムと、ナバルの妻であったカルメル人アビガイルといっしょに、そこへ上って行った。

2:3 ダビデは、自分とともにいた人々を、その家族といっしょに連れて上った。こうして彼らはヘブロンの町々に住んだ。

主にヘブロンへ行くように言われたダビデに同行している。究極的にダビデはヘブロンでユダの王となる。ここでやっと自分の語った預言が成就する。

II サムエル記3:1-5

3:1 サウルの家とダビデの家との間には、長く戦いが続いた。ダビデはますます強くなり、サウルの家はますます弱くなった。

3:2 ヘブロンでダビデに子どもが生まれた。長子はイスラエル人アヒノアムによるアムノン。

3:3 次男はカルメル人でナバルの妻であったアビガイルによるキルアブ。三男はゲシュルの王タルマイの娘マアカの子アブシャロム。

3:4 四男はハギテの子アドニヤ。五男はアビタルの子シェファテヤ。

3:5 六男はダビデの妻エグラによるイテレアム。これらはヘブロンでダビデに生まれた子どもである。

アビガイルはダビデの子、次男を生む。ダビデの子でトラブルを起こす息子もいるが、

アビガイルの子は、家庭内のトラブルはなかったので、育て方が良かったのかもしれないが、手柄を立てているようでもない。

I 歴代誌3:1-9

3:1 ヘブロンで生まれたダビデの子は次のとおりである。長子はイスラエル人アヒノアムによるアムノン。次男はカルメル人アビガイルによるダニエル。

3:2 三男はゲシュルの王タルマイの娘マアカの子アブシャロム。四男はハギテの子アドニヤ。

3:3 五男はアビタルによるシェファテヤ。六男は彼の妻エグラによるイテレアム。

3:4 六人の子がヘブロンで彼に生まれた。ダビデはそこで七年六か月治め、エルサレムで三十三年治めた。

3:5 エルサレムで彼に生まれた者は次のとおりである。シムア、シヨバブ、ナタン、ソロモン。この四人はアミエルの娘バテ・シュアによる子である。

3:6 イブハル、エリシャマ、エリフェレテ、

3:7 ノガハ、ネフェグ、ヤフィア、

3:8 エリシャマ、エルヤダ、エリフェレテの九人。

3:9 みなダビデの子であるが、別にそばめたちの子もあり、タマルは彼らの姉妹であった。

アビガイルの息子はどうもダビデの次男一人だけだったようだ。